

嶋泉心足齋

*Shimajumi Shimokuni*

中国科学說話  
雜識



## 1. 移植二題

---

中国は古代から医学の発達していたところで、一般に漢方薬と鍼灸が知られていますが、意外と外科も進んでいました。もっとも、その系統は、発達はしなかったのですが。

有名なのは『三国志演義』にも登場する華陀先生でしょう。彼は「麻沸散」という麻酔薬を用いて切開手術を行っていたとされます。患者の脾臓の半分を切除したという事例も記録されています。良く知られたエピソードは毒矢を受けた関羽の腕を切り開き骨を削る手術をし、関羽は麻酔をしていないのに、手術の間、平然と碁をさしていた、というものでしょう。また、実現には行っていないものの、曹操の頭痛を治すのに頭を切り開いて手術をしようとした。華陀は、このことが原因で曹操に恨まれ、殺されてしまいます。

もっとも、どちらも『三国志演義』の創作のようで、正史『三国志』にはそのような記述はありません。

今回ご紹介するのは、ちょうど『三国志演義』の原型になる話ができあがりつつあった宋代のものです。

まずは、徐鉉『稽神録』から一例。

### ◎陳寨 宋・『稽神録』

陳寨は泉州晋江の祈祷師である。まじないの術に優れていて、人を治療すると、病は大抵好くなった。澶州の宿屋の主人・蘇猛は、子供が発狂し、誰も治療できなかったので、陳寨に頼むことにした。陳寨がやってくると蘇の子供は手を振り上げて罵った。陳寨は「この病は心臓に入り込んでいます」と言った。そして部屋の中に壇を設け、盗み見ないように戒めた。

夜になると、その子どもをまっぴたつに斬って、部屋の東の壁に掛け、心臓は北の軒先にぶら下げた。陳寨が部屋で術を行っている間に、ぶら下げておいた心臓は犬に食われてしまった。陳寨は心臓を捜しても見つからないので驚きおののき、刀を手にして地面を転げ回ると、門から出て行ってしまった。主人の蘇猛はそんなこととは知らず、術を行っていると思っていた。

間もなく陳寨は心臓を持って戻ってきて、病人の腹に収めた。髪を振り乱ししきりに気合いをこめると、腹は閉じてしまった。蘇の子供は気がつく、しきりに「逋舖、逋舖」と叫んだ。家族は訳が分からなかった。

実はその日、蘇の家から十里離れたところで、駅亭の役人が公文書を持ったまま、道端で死んだのだった。そもそも南方の会堂では二十里に一つの駅亭（これを逋舖という）があって、役人が文書を持って次々に送り渡し、次の駅亭に近づくと、しきりに叫ん

で注意を促すのだった。つまり、陳寨は馭亭役人の心臓を取ってきて蘇の子供を生き返らせたのだった。蘇の子供はこうして元通りに治ったのであった。

「胴体を真っ二つにしてくっつける」と言うのがそもそも無茶であり、多分に呪術的で、怪奇な術の一部として捉えられていると言えます。「部屋で術を行っている間に、ぶら下げておいた心臓が犬に食われてしまった」というのが何とも間抜けな話ですし、その日、蘇の家から十里離れたところで馭亭の役人が道端で死んだ」というのもご都合主義に過ぎますが、そもそも「物語」を作り上げようなどという意識概念が存在していないようなので、ご勘弁いただきたいです。

この作者の徐鉉という人は、弟とともに、六朝の陸機・陸雲に比せられる、宋を代表する大学者なのですが、どうも同じく文人・官僚で「神道（超現実的な心理）」を明らかにするために『搜神記』を著した干宝と同じような心境で『稽神録』を編纂したようなのです。どうやらこれも誰かが話していたのを、徐鉉は「道」を明らかにする「信ずべき」事例として収録しただけのようで、お話を作り上げようなどという気はさらさら無かったものと思われまます。

次は、南宋の洪邁が著した『夷堅志』から一例引きたいと思います。この洪邁もその時代を代表する文人なのですが、恐ろしくパワーのあった人らしく、『容齋隨筆』という隨筆の大部な名著を著す一方で、晩年に『夷堅志』全420巻(!)を著しました。同じく小説を集めた北宋の『太平広記』（前の徐鉉も編纂メンバー）は500巻ありますが、こちらは人海戦術で作っています。それに匹敵するものを個人で作り上げてしまったというとんでもない人です。同じように個人で話を収集した『聊齋志異』四四五話（原稿の発見などで、元々はもっと多かったことが確認されている）の規模と比較すれば、すごさが実感できるかと思います。もっとも、今では散逸して207巻分しか残っていません。

#### ◎邢氏補頤 宋・『夷堅志』巻19

晏肅は字を安恭といい、河南の邢氏の娘を娶って、都に住んでいた。邢氏のおとがいに疔が出来、これが長引いて、おとがいは下顎や歯と一緒に切断したように腐り落ちてしまった。邢氏はすぐに死ぬと思って、色々と医者を訪ねた。ある医者が「これは簡単です。一万銭を頂ければ治して差し上げましょう」と言った。そこでその方法を尋ねると、「生きた人間のあごであなたに会うものを手に入れてくっつければよいのです」ということであつた。晏氏の妻は怖くなってすぐに立ち去った。ただ、子供達や召使い達は、密かに医者に金を渡してその方法を試みてもらった。ある夜、医者が絹の包みを

一つ持ってやって来た。見てみると、なんと女性のおとがいであった。肌の色や幅や長さなどは邢氏と寸分違わなかった。医者はおとがいを薬で接合して布で包んだ。ただ粥を啜るだけにして、半月後に布を開いてみると、もう治っていた。

後に晏肅一家は乱を避けて会稽（今の紹興）に移り住んだ。唐信道は晏家とは姻戚関係で、かつて氏に会ったことがあった。邢氏は口端の所に赤い線が一本あって、ぼんやりと頬まで続いていた。二十年あまりして、邢氏は亡くなった。

かなり控えめな感じで、前の話に較べれば、より「ありそう」ではありますし、実見の伝聞にしてリアリティを出そうとしています。もっとも、薬を付けただけで、半月間で神経までくっつくというのは無理がありますが、その程度の嘘はジョン・ウー監督の「フェイス／オフ」でもついていますから、大目に見ることにしましょう。「フェイス／オフ」の方は、そもそもニコラス・ケイジとジョン・トラボルタの顔の大きさからいって、とてつもなく無理があります。

また、腹部の切開手術については『三国志』にもあると冒頭に少し紹介しましたが、これも単なるエピソードですから「事実」ではないかもしれませんが、唐代の医学書『諸病源候論』には、腸の結合手術と術後の療養について具体的に書かれているようです。同じく『夷堅志』の「再補」所収「朱道人治脚攣」では脚部の複雑骨折を軍医が治療したことと、動かなくなった脚に朱道人が指導してリハビリテーションを施したことが見えます。これは記述も実に真実味があり、もともと『名医類案』という医師のエピソード集に引かれて残っていたものですから、かなり実話に近い物でしょう。

そのようなわけで、唐宋の時代には切開手術などの高度な手術が神業では無くなっていたのは間違いないでしょう。そんなわけで、こちらの方は、時代的社会的状況と、描写と内容の真実味と併せて考えると、前者のように荒唐無稽として片づけるのは可哀想でしょう。まさに「現実の科学に基づいて、一步空想の跳躍を行ったもの」といっていいかもしれません。

## 2. 奇病二題

---

治療について見た後は、病について見てみたいと思います。

ある日突然に、人の体が縮み始める。時たまSFに見られる発想です。手塚治虫『ブラック・ジャック』の中にも、こんな奇病が登場していました。それに共通する話を拾ってみましょう。

◎魏淑 『太平広記』巻220引『集異記』

大暦中（766～779）、元察が州（四川省）刺史であったとき、邛州の武将に魏淑というものがいた。立派な体格をしており、年は四十になったばかりで、老いた親と若い妻がいた。あるとき俄に奇病にかかった。苦しいところはないが、ただ飲食することが日に日に損なわれ、体が縮んでゆくのであった。医者や術士もどうすることもできなかった。一年経たずに、嬰兒ほどになってしまい、歩くことも座ることも言葉を話すこともできなくなってしまった。そこで、彼の母親と妻が、交代で彼を抱きかかえることになった。

魏淑の誕生日になり、家の者は僧侶を招いて食事を振る舞った。妻がかんざしの股に食べ物を挟んで魏淑に食べさせると、すぐに小鉢一杯ほどを平らげた。この日から日を追うごとに食事の量が増えて体もだんだん大きくなり、半年経たずに元の大きさに戻った。

元察は魏淑に元の官職を授けた。走ることも馬を駆ることも気力にあふれ、依然と何ら異なるところはなかった。後十年あまりして、勇猛果敢に陳の地で戦死した。

発症も完治も全くの原因不明というのはものたりない感じがしますし、医師に重点が置かれた医学的説話ではないので、無力だった医師たちの治療過程についても全く触れられておらず、残念です。また、縮んでしまったことによって彼とその周りに一体どういう事態が引き起こされ如何なる事件が発生するのか、という点への着眼が全くないというのも発展性が無く、今日の我々から見ると面白味に欠けると言えます。

この話の中の魏淑は幸いにも元に戻って武人らしい最期を迎えられたわけですが、後年、不幸にも同種の病にかかって死んでしまった人の記録も、宋の『夢溪筆談』や明の『五雜俎』に記されています。それによると、臨終の時には四、五歳児ほどの大きさになっていたといえます。

さて、縮む病があれば、その逆もまた存在します。お次はある日突然からだがどんどん大きくなってしまった人のお話です。

◎皇甫及 『太平広記』巻220引『三水小牘』

皇甫及という人の父親というのは、太原府（山西省）の少尹（副長官）を勤めた人で、及を大変可愛がっていた。及は生まれたときには普通の子供と変わらなかったのだが、咸通十三年（872）に十四歳になると、突然奇病にかかってしまった。肉を切り骨を断つというような苦しみは何もなかったが、急激に体が大きくなっていったのである。しばらくすると身長は七尺（約218cm）を越え、胴回りも数抱えに及んだ。飲食することも甚だしく、昔の三倍になった。翌年の秋、他の病気がないのに死んでしまった。

数え年で十四歳という事は満でだいたい十三歳、いずれにしても成長期に当たるでしょうから、食事の量が増え、体が大きくなるのは自然なことです。やはり数ヶ月で2メートルを超えるというのはさすがに異常と言うべきでしょう。

ただ、最終的な体格は荒唐無稽な大きさではなく、常識的に言ってあり得る範囲であろうと思います。『三国志演義』で有名な関雲長は身の丈九尺を超えており、諸葛孔明も八尺という長身です。唐では一尺は約31cmですが、三世紀頃の度量衡では一尺は23～24cmですから、九尺でだいたい207～216cm、八尺で184～192cmというところになります。それに、秦の始皇帝の陵墓周辺から発掘された有名な「兵馬俑」の兵士の平均身長は180cmほどもあったといえます。そういった目で見れば、物語を作ろうという意識が希薄で、空想としての飛躍が今ひとつという印象が強く、先の『稽神録』同様、文言小説衰退期のものというのがうかがえます。明清時代であれば、もう少し空想として何とかなっていたのではないかと、惜しい気がします。

## 1. 「蛍光」について

---

「蛍の光」とくれば「窓の雪」――そこで思い起こされる「蛍雪」といえば、晋の車胤と孫康が貧しくて油も買えないので蛍火や雪光によって苦学したという有名な故事ですが、今回はこの本物の「蛍の光」ではなく、「蛍光」塗料と呼ばれるものについて考えてみたいと思います。

中国人は蛍の光などの自然界における発光現象に興味を抱いていたようで、「南海に珠がある。すなわち鯨の目玉である。夜にも見ることができるので、これを〈夜光〉という」（『太平広記』巻402引『述異記』）や、「夜光芝は一株に九つの実が生り、実が地に落ちると七寸の鏡のようである。夜に見れば牛の目のようである。」（『酉陽雜俎』巻19）などの記述があちらこちらに見えます。これらは自然に発光している物ですが、物が変化して光を放つという例もあります。たとえば、『宋書』巻三十・五行志一の「木不曲直」に、

宋の明帝の泰始二年五月丙午（29日、AD266年7月18日）、南琅邪郡臨沂（山東省）の黄城山の道士・盛道度がいる山寺で一本の柱が自然と夜になると光を発し室内を照らすようになった。この木はその本来の性質を失ったのである。或いは木は腐ると自ら光るのだというものもある。

という話が見えます。腐った植物が光るということでは、『礼記』月令に「腐草が蛍になる」という、O・S・カード『死者の代弁者』を思わせる記述もありますが、J・ニーダムやロバート・K・G・テンプルは、これは古代人が腐った草の発光現象と蛍の光を結びつけた結果であるとしています（『中国の科学と文明』、『図説・中国の科学と文明』）。

いずれにしても、これらは全くの自然現象であり、そこに人為的な操作が介入した形跡を認めることはできません。ところがニーダムやテンプルは、遅くとも十一世紀には「蛍光塗料」が存在したとして証拠をあげています。それが、以下に示す徐知諤の牛の絵に関する話です。

◎「徐知諤」 宋・釈文瑩『湘山野録』巻下

江南の徐知諤は潤州節度使温の子供である。優れた資質の持ち主で、珍しいものを集めることを好んだ。蛮人の商人が鳳凰の頭を手に入れた。鳥の首の剥製であった。緑の羽（尾羽か？）は目を奪わんばかりで、朱色の冠や紺色の羽毛、金色の嘴は生きている

かのように、ちょうど大きな雄鳥に似ていた。幅が五寸、その頭は平らになっており、枕とするのに適していた。知諤は五十万銭で買った。

また、一幅の牛の絵を入手した。昼には柵の外で草を食べているが、夜には柵の中に帰って寝るのである。知諤は後唐の後主・李煜に献上し、李煜は天子さまに献上した。太宗陛下は後苑において群臣に示したが、誰にも（秘密が）わからなかった。ただ僧の録贄寧が言うことには、

「南倭の海の水はある時には無くなり、海底がわずかに姿を見せます。すると倭人は方諸蚌（大蛤）を拾うのです。貝の中には涙粒（真珠のことであろう）が数滴あります。これを得て絵の具と混ぜて物に塗れば、昼には隠れ、夜には現れるのです。沃焦山（岷山の異名でもあるが、ここでは東海の南三千里にあるという山のことであろう）では激しい風が吹き荒れ、突然海岸に石が落ちることがあります。これを得て、水をたらし絵の具と摺り合わせて物を染めると、昼には明らかに夜には暗くなるのです。」

ということであった。諸学者たちはみな荒唐無稽だと思ったが、録贄寧は張騫の「海外異記」に見えると言った。そこで後に杜鎬が皇室図書館の書目を調べてみると、果たして六朝時代の古い写本の中に書かれてるのを見つけた。

李煜は宋の開宝四年（971）に弟・李從善をして宋の太祖へ朝貢せしめています。その後、同八年（975）に都・金陵が宋軍によって陥落せられてより、太平興国三年（978）に薨るまで、李煜は汴京に幽閉せられていますから、この話自体はおおよそ十世紀末の出来事と考えられます。

「方諸蚌」の真珠というのがでてきます。「六朝時代の古い写本」云々は確認できないものの、唐代の『広異記』という書物にも、長安の至相寺にすむ賢者がお堂の下にいる蛇を長年かわいがっていたところ、ある夜、灯りもないのに堂内が明るいので調べてみると、蛇の住処で夜光珠を発見、西域から来ている商人に売ると、商人が「蚌珠は則ち貴し。此れ乃ち蛇珠なり。多く千貫に至る。」と言った、などとありますから、「方諸蚌」の真珠もそういった「夜光珠」なのでしょう。「夜光珠」は、隋の煬帝などの皇帝や、神仙などの宝としてしばしば名が上がり、「上なるものは夜光四十余里を照らし、中なるものは十里、下なるものは一里」というようにも描かれますが、実際に発光していたというよりは、半分は空想の産物、残り半分は輝きのすばらしさを表現する方法といった方がいいのではないかと思います。

ともかく、蛍光塗料があったこと自体は確かでしょうが、「方諸蚌」の真珠を材料に蛍光塗料を作るという解釈は、真珠の輝きからの連想で、『礼記』月令の「腐草が螢になる」のような一種の誤解であろうと思います。

しかし、完全に否定してしまうこともまた難しいのではないかと考えられます。つ



まり、牡蠣の殻から作られた硫化カルシウムが西洋初の蛍光塗料〈カントンの燐〉だったことを考えると、真珠と牡蠣の殻と成分的に大した違いはないでしょうから、あなたが非科学的とは言えなくなってくるの困ってしまいます。

しかし、これまでのことはおおむね科学史の書物でも触れられていることであって、空想としての醍醐味がありませんから、やはり少しは不思議さのある話も紹介しておきたいと思います。『酉陽雜俎』巻2・壺史に見える話です。

長慶の初め（821）、山人楊穩之は郴州にいて、いつも道を得た人を訪ねていた。唐居士という人がいて、土地の人は百歳だと言っていた。楊が彼に会いに行くと、彼は楊を引き留めて宿泊させた。夜になると、娘を呼んで、「下弦の月を一つ持ってきなさい」と言いつけた。すると娘は壁に月を貼り付けたが、一片の紙のようであった。唐がすぐに呪いをして、「今宵客が来ました、どうか光を賜りますよう」と言い終わるや、部屋の中が火を灯したように明るくなった。

この「下弦の月」を貼るというのによく似た描写は、『宣室志』所収「王先生」にも見られます。こちらでは、「（王先生が娘の）七娘に、『おまえは私のために紙を今夜の月の形に切り、部屋の東の壁に貼っておくれ』と言いつけた。しばらくして、七娘は紙の月を壁の上に張り付けた。夕方になると奇妙な光が自然と発し、部屋を明るく照らした。細かなものまですべてみることができるほどだった」となっています。これらの話は後に、『聊齋志異』所収「勞山道士」に見られる、「道士が二人の客と一緒に飲んでいて、日も暮れて暗くなったので鏡のように円く紙を切って月を作り、壁に貼り付けて明かりとした」というエピソードに利用されています。紙を切って作った月の象徴に、道術によって月の光を借りたとでも言うような感じですし、『酉陽雜俎』の著者・段成式は、徐知諤が手に入れた牛の絵の話より百年以上も前に死んでしまっていますが、紙そのものに蛍光塗料が塗ってあった、という〈種明かし〉も無理ではないでしょう。果たして蛍光塗料の明かりで、「部屋の中が火を灯したように明るくな」るかどうかは分かりませんが。

## 2. 魔法瓶

---

暖かいものはいつまでも暖かく、冷たいものはいつまでも冷たく、鏡と真空によって伝導と輻射を妨げ、内部の温度を一定に保とうとする「魔法瓶」は、かつてはお茶の間の一角に確固たる地位を占め、いまは水筒などに技術的に発達し洗練された姿を示しています。この近代科学の産物の一つに通じる発想が、千年近く前の中国に認められるのです。

### ◎伊陽古瓶 宋『夷堅志』巻15

張虞卿は、文定公・張齊賢の子孫である。彼は西京の伊陽県にある小水鎮に居を構えていたが、あるとき土の中から古い焼き物の瓶を掘り出した。色は真っ黒であった。彼はこれを大変気に入って、書齋に置いて花を生けていた。冬になり寒さが厳しくなった頃、ある夜に水を捨てるのを忘れてしまい、凍って割れてしまっただろうと諦めてしまった。翌朝見てみると、ほかのところの水は皆凍っているのに、この瓶の水だけは凍っていなかった。これを訝り、試みにお湯を注いでみると、丸一日経っても冷めなかった。張はある時、客と郊外に出かけたが、瓶を箱の中に入れておき、これで水を注いで茶をいれた。全く新しく沸かしたようであった。これから、彼はその珍しさを認識して瓶を惜しむようになった。後によった召使いが壊してしまった。その中を見ると普通の陶器と変わらなかったが、ただ二重底で厚さが二寸もあり、鬼が火をとって燃やしている絵が極めて精巧に描かれていた。これがいつ頃のもののなのか知っているものは誰もいなかった。

色が真っ黒では輻射熱を吸収してしまいますから、いささか「魔法瓶」としては問題があります。それから、二重底と解したのは原文では「夾底」で、辞書を引いてもよくわかりません。もしかしたら高台の事かも知れません。仮にこの解釈があっているとすると、科学的に言っても、ある丁度は伝導を抑える効果があったとすることができるのではないのでしょうか。故宮博物院の宝物の中には、壺の側面に開けられた窓から、内側にある少し小さい壺の側面が見えるという、二重にはめ込まれた壺など、どうやって作ったのか頭を悩まされる奇妙な、しかし高度な技術の産物である工芸品がいくつかありますから、二重底で熱伝導を抑えるような焼き物も、もしかしたら本当に焼けたのかもしれない。さすがに今日の魔法瓶から見ると科学的に言って首を傾げたくなるのは致し方ないですが、それにしても、こんな事を一応もっともらしい理由説明も含めて思いつくというのは大したものです。

### 3. 蚊取り

---

夏の暑さには、我が国の先人達も大いに悩まされてきました。あの手この手で涼しくしようと工夫してきました。江戸時代には手動の扇風機も考案されていました。しかし、暑さ以上に人々が辟易した、そして今も悩まされるものがあります。「蚊」です。

蚊に悩まされて来たのは、我々だけではありません。東南アジアなどでは、マラリアの危険性がありますから、我々よりもずっと深刻と言えるでしょう。中国大陸でも事情は似たようなものです。当然どうすれば、蚊の災いから逃れることができるか、人々は考えたはずです。

成都から北東へ250キロ、喜陵江と東游水が交わるところに位置する地方都市、四川省閬中県。南宋の書物は、この街を舞台にした、「蚊よけ」の願望から生まれた物語を記録しています。

#### ◎閬州道人 宋・洪邁『夷堅丙志』巻18

閬州（今の四川省閬中県）はもともと蚊が多く、街で眠るものは終夜瞼を合わせることもできない有様であった。とある道人が一軒の宿に泊まった。主人は道人を大変厚くもてなした。しばしば呼んでは少し酒を飲ませる上に、金銭については一切気にしなかった。

数ヶ月留まって後、去るに及んで道人は主人に別れを告げ、再三感謝した。そして井戸の側に歩み寄った。

「私がここに長らく留まっている間、あなただけはよく面倒を見てくださいました。しかし、私にはそれに報いる手だてがありません。せめてあなたの家を永遠に蚊に煩わされないようにして差し上げたいと思います」

瓢箪の中から薬を一粒取り出し程度に投げ入れ、「しっかりと蓋をして、三日過ぎてから汲むように」と戒めた。そしてそのまま去っていった。

果たして、その言葉通りになった。夏になるごとに夕方には蚊が軒先でブンブンうなるけれども、そこから部屋の中には入ってこなくなった。

張魏公が川陝宣撫使に任命されたとき、役所を閬州に置いた。士人や商人が数え切れないくらい訪れるようになったが、皆がこの宿に集まってしまい、戸外のあちこちに宿るものまで出る始末となった。おかげでこの宿の収入は他の宿屋の数倍にもなった。

実にすばらしい蚊よけ効果が発揮されています。話の骨子は、昔話や説話によく見られる〈善行に対する異人による報恩〉のパターンです。しかし、その素朴さ故に、彼（蚊？）の地の人々がどれだけ苦しめられていたのかが伝わってきます。

また、閩中県は山岳地帯に位置しており、緯度でも上海より少し北（約31.5度）、つまり鹿児島よりも南になりますから、蚊の被害の多いことは想像に難くありません。

さて、我が国を例に、「蚊」を防ぐ手段を見てゆくと、長らく愛用されてきた「蚊帳」が、まず挙げられます。今でも使っているお宅があるかと思います。なかなか風情があつていいものですが、万全とは言えません。こちらが中に入るときに、蚊まで入ってしまったのでは元も子もありません。しかし、蚊が入ってこれない眼の細かな檻の中に、人間が入る訳ですから、これ以上自然に優しい手段はないでしょう。

次いで、一種の非常手段として用いられたのが、「蚊遣り」。松の葉などの煙で蚊を寄せ付けないようにするというものですが、如何せん人間まで燻されてしまいます。

変わったところでは、もう今では姿を消してしまったガラス製の「蚊取り器」があります。二酸化炭素の発生源に群がる習性と、走光性を使った、一種の仕掛けでした。

しかし、なんとといっても「蚊取り線香」がもっとも革命的と言えるでしょう。現在の虫除けや殺虫剤は、全てここから始まっているのですから。

ご存じのように、「蚊取り線香」の原料は、「除虫菊（*Chrysanthemum cinerariaefolium* Visiani）」です。原産地は地中海周辺や中央アジア地域で、ユーゴスラビアのダルマチア地方で発見されました。わが国では、明治19年（1886年）、大日本除虫菊の創始者・上山英一郎が慶応義塾の恩師・福沢諭吉の紹介で知遇を得たアメリカ人から種子を譲り受け、故郷の和歌山県で栽培したのが最初ようです。主として和歌山県で栽培されましたが、明治23年（1890年）の上山翁が広島県の向島町での栽培を開始後、瀬戸内島嶼部に広まり、大正6年（1917年）には広島県が和歌山県を栽培面積で凌ぎ、一大生産地となりました（今でも、広島県向島町の亀森八幡宮では、毎年五月に上山翁を偲ぶ「除虫菊祭り」が行われています）。

このころになると、白い可憐な花を付ける除虫菊は単なる農作物ではなく、一般的な観賞用栽培植物ともなったようで、洋画家の黒田清輝も1915年5月5日の日記に、「午前中草花ノ種蒔ヲナシ（中略）夕刻除虫菊ノ苗ヲ植ウ」と記しています。

そして、昭和10年代には世界の総生産額の98%を日本が占め、北海道産だけでも50%に達するまでになりました。しかし、その後は栽培面積も減少、昭和43年頃には作付けがほぼ無くなり、現在では、香川・岡山・広島 of 三県に約20ヘクタールが残るのみとなり、ケニア産除虫菊を輸入して使っています。

殺虫成分はピレトリン。その特徴は、昆虫に対しては、極めて微量で速攻性の接触毒として作用しながらも、温血動物の体内に入ると速やかに解毒されるという、人間にとっては非常に都合の良いものです。もっとも、現在ではピレトリンに類似の合成ピレト

ロイドが使われていて、天然のピレトリンのみを含む製品は、ごく少数になっています。そして、日本の風物詩とも言える「蚊取り線香」自体がマット式、液体式の電気蚊取りの普及で姿を消しつつあります。

さて、「閩州道人」の物語に登場する虫除け薬、「三日過ぎてから」という条件は付いているが、水が飲めるようになっているので、どうやら人には害が無くとも、蚊には効果靦面の様子。この点は、ピレトリンやピレスロイドに非常によく似ています。そして、水に溶かしてあるというところなどは、当世はやりの液体式電気蚊取りにも近い。しかも電気蚊取りが、いかに蚊取り線香やマットに比べて便利になったとはいえ、せいぜい120日（もちろんこれだってすごいことには違いない）というのに、「閩州道人」の薬は宿全部をカバーしてなお半永久的に効果が持続し、手間は一切不要、使い勝手では、電気蚊取りを遙かに凌駕しています。もっとも井戸水全部が溶液という、とてつもない量なので、効果が長続きするのは当然かも知れません。

しかし、ここで化学的に注意したいことが一つ。それは、ピレトリンやピレスロイドが水に対しては不溶性であるということ。金鳥（大日本除虫菊）は「水性」の電気蚊取りを発売していますが、これは、金鳥独自の特殊な処方ではピレスロイド系のフラメトリンを水に溶かしているようです。

昔の人々は、薬を溶かすには水かせいぜいが酒ぐらいしか思いつかなかったでしょうから、「閩州道人」が薬を井戸に投げ込んだのはむしろ、想像力の限界として仕方のないことかもしれません。しかし、それが結果としては現代の科学を先取りした格好になってしまっているところが面白いと言えましょう。複雑さを積み重ねてより高度なものを目指した結果として、もっともシンプルな発想に落ち着いたと言ってもいいでしょう。

ちなみに、大日本除虫菊の「鶏（金鳥）」の商標は、明治43年に創業者の上山英一郎が司馬遷『史記』蘇秦伝に見える「鶏口と為るも牛後と為る無かれ」の故事に基づき、業界の「鶏口」となるべき自覚と気概を込めて、登録したということです。

## 0. 章序

---

SFの嚆矢、ジュール・ヴェルヌの紡いだ物語は、異世界への冒険ということに尽きると思います。月世界、地底、海底、それまで人々が目にするのできなかった世界への旅立ちに必要なであったガジェットを科学的に描き出したことが、彼の特筆すべき特徴でしょう。中でも印象深いのは、宇宙船と潜水艦ではないでしょうか。

今回は古代中国の物語の中から、それらを拾ってみたいと思います。なお、宇宙船などの飛行機械については、参考文献に挙げた武田雅哉氏の著作に、近代中国の物語に至るまで幅広く紹介されています。

## 1. 宇宙船——「星への筏」と「空飛ぶ車」

---

まず、有名なところでは、「貫月槎」「八月槎」というものがあります。「槎」は「筏」の同義語で、よくそのように訳されているので、ここではそれに従っていますが、私は個人的には、むしろ「丸太棒」などとした方が相応しいのではないかと考えています。

### ◎貫月槎 晋・王嘉『拾遺記』

堯が位について三十年目、西海に巨大に筏が浮かんだ。筏の上には光があり、夜には明るく輝いて昼には消えた。海辺に棲む人々はその光を見ると、大きくなったり小さくなったりして、星や月が出入りしているかのようなようだった。筏はいつも浮かんでいて、四海をめぐり、十二年で天を一周し、一周するとまた初めに戻るといふ。「貫月槎」或いは「挂星槎（星に至る筏）」と呼ばれる。羽人がその筏の上に棲んでいる。前任達が露を含んで口を漱ぐと、日月の光も暗くなってしまうようである。虞（舜）と夏（禹）のときには、それが現れたとは記録されていない。しかし、海辺に暮らす人々は今もその偉容を伝えている。

この筏は、単に羽人の乗り物であることを人々が目撃していただいただけではなく、人を宇宙に運んでもいるのです。

### ◎八月槎 晋・張華『博物志』卷10・雑説下

古い言い伝えに次のようにある。天の川と海とは通じている。少しばかり昔、海辺に棲む人がいた。毎年八月に筏が漂着し、大変大きく、また、やって来るのも去るのも期日を違えるということがなかった。ある人が好奇心を持って、筏の上に小屋を建て、食料を蓄えて、筏に乗って去っていった。十日あまりして、太陽や月、星がぼんやりとして、昼とも夜ともつかなくなかった。更に十日あまり経って、とある所に着いた。城郭があり、建物も立派であった。遠く宮中に機織り女が見え、また一人の男が牛を引いて、水辺で水を飲ませていた。牛を引く男が、やって来た人を見て驚き、どうやってここに来たのかを訪ねた。その人はつぶさに事情を述べ、ここがどこかを訪ねた。牛を引く人は「君は帰ったら蜀に行って、嚴君平を訪ねなさい。そうすれば分かるでしょう。」と答えた。岸には上がらず、期日通りに帰り着いた。後に蜀に行き、嚴君平に尋ねると、「某年某月某日に牽牛星のところに突然星が現れた。」と言われた。年月を考えると、この人は天の川に行ったのであった。

好奇心から、乗り込んだ人が自動運行する筏によって天界に連れて行かれてしまうという所はスリリングですが、天界での見聞が、織女が機を織り、男が牛を牽いているという、まさしく七夕伝説の実にのんびりとした風景なのは中国大陸ならではと言ったところなのではないでしょうか。最後に嚴君平によって解説が施される所は、博識で伝説や神秘に通曉した人が謎を明らかにするという、古代中国の説話に典型的なパターンで、嚴君平はあちら此方に顔を出します。そして、時代が降ると、嚴君平の役どころは、この話の出典である『博物志』の著者・張華に取って代わられることとなります。いずれ、張華が登場する話も紹介することになるかと思えます。

この話は六朝時代も後半にさしかかると、西域探検で知られる漢の張騫が筏に乗って天の川に行き、織女から機織り機を押さえる石を貰って帰ったという話になって語り伝えられます。そして、唐の詩人の多くが、七夕などの詩にそのことを詠み込み、「星槎」「仙槎」とも呼ばれるこの筏を、一瞬して人を遠くへ運んでくれる幻想の乗り物として捉え、しばしば望郷の想いを託しています。

その唐代、『洞天集』（『太平広記』巻405引）によると、この「八月槎」は歴史と伝説の彼方へと消えたのではなく、実は国家によって保管されていたということになっています。当時は「嚴遵仙槎」と呼ばれていました。「嚴遵」というのは、漢の時、成都から出た人で、名を「君平」と言います。そうです、「八月槎」の「嚴君平」その人です。

#### ◎嚴遵仙槎 『太平広記』巻405引『洞天集』

「嚴遵仙槎」は、唐の時には麟徳殿に保管されていた。長さは五十尺（15.6m）あまり、（叩くと）金属のような音がして、堅くて虫も食わない。李徳裕（九世紀前半の宰相）が一尺あまりの細かい枝を切り取り、道教の神像を彫らせた。時々飛び去っては、また戻ってきたが、広明（880～881）年間以降無くなってしまった。「仙槎」も飛び去ってしまった。

別の飛行機械にまつわる話ですが、これよりも古く、且つもっと国家の意図が明確に記された記録があります。しかも此方は「一本腕、三つ目、両性具有」（『山海経』）という、見るからに異星人かロボットかという外見の「奇肱国人」が登場します。

#### ◎奇肱国 晋・張華『博物志』巻2・外国

奇肱国の民は機械を作るのに優れていて、それで百禽を捕らえていた。また「飛車」を作り、風に乗って遠くまで行くことができた。殷・湯王の時に、西風が吹き、この飛車が豫州にやってきた。湯王は飛車を破壊して民衆に見られないようにした。十年経つ



て東風が吹いたとき、飛車を復元して帰らせた。その国は玉門関を去ること四百里のところにある。

両者とも、政府が未知の飛行機械を保管していたというものであり、後者では「破壊して民衆に見られないようにした」や「復元して帰らせた」など、異人との共謀、国家的陰謀のニュアンスが色濃く醸し出されています。これらを見ると、某プロデューサーが盛んにテレビで盛り上げたために、日本では異常に認知度が上がってしまったロズウェル事件に端を発する一連の騒動が、実に目新しさのないものであるというのが分かります。

さて、「槎」と「車」のどちらがより飛びそうであるかと言われても困るところがありますが、どちらがより乗り物として洗練されているかと言えば、それはもちろん「車」でしょう。どうやら、空飛ぶ車の方が認知度は高かったようです。清代の小説などにも「空飛ぶ車」が登場しています。また、「仙人」或いは「神仙」と呼ばれる「異人」は異世界を往還し、空を飛び水に潜り、岩や壁を降り抜け、瞬間的に移動したりということを自由自在に行いますが、大抵身体一つ、或いは鳥などに乗って飛んできます。そんな彼らも、乗り物を利用する場合には、『漢武故事』や『漢武帝内伝』などに登場する西王母がそうであるように、車に乗ってくるのです。昔、「八月槎」に乗った人が目撃した織女も、唐の功臣・郭子儀の元に降臨してきたときには、「車」を利用しました。その場面を見てみましょう。

#### ◎郭子儀 『太平広記』巻19引『神仙感遇伝』

（郭子儀が都から兵站物資を運んで）銀州（陝西省）まで十数里のところまで帰ってきた時、日が暮れてしまった。おまけにたちまち砂嵐に遭い、荷物を守ることもできないほどで、道ばたの空き家に逃げ込み、そこに宿営すことにした。夜になって、突然あたりに真っ赤な光が溢れた。空を見上げてみると、煌びやかな幌をかけた車が見えた。中には一人の美女が、長椅子から脚を垂らして座っていた。そして天から降ってきて、此方を見下ろしていた。郭子儀は拝礼して、「今日は七月七日。きっと織女が降臨されたに相違ありません。どうか長寿富貴を賜りますよう」と祈った。

「突然あたりに真っ赤な光が溢れた。空を見上げてみると、煌びやかな幌をかけた車が見えた。」というあたりなど、目撃報告や映画に登場する、眩い光を発して飛んでくるUFOによく似ています。しかし、織女は牽牛との逢瀬をすっぽかして、こんな事をしてよいのでしょうか。そう思って探してみると、七夕の夜には女性が織女に裁縫の上達を祈る風習があるのですが、そんな女性のものにやってくるのはまだいいとしても、

天帝の言いつけとはいえ、男の所に降ってきて、その男が、「牽牛殿はどこにおられるのですか。どうしてわざわざ独りでおいでになったのですか」と尋ねると、「男女の間のことがどうして彼に関係あるでしょう。そのうえ、天の川は遠く隔たっています。彼には知る由もありませんし、知られたとしても心配することはありません」としている例（「郭翰」出『太平広記』巻68引『靈怪集』）まであるのです。

## 2. 「抜宅昇天」——古代中国の「宇宙家族ロビンソン」

さて、何も向こうからやってくるばかりではないのです。「八月槎」の場合は、やってきていた宇宙船に巻き込まれる格好で宇宙に行ってしまった、というようなパターンですが、明確な意図の元に人が巨大な乗り物に乗って旅立つという発想もちゃんとあるのです。

先ほど、「神仙」の話を少し述べましたが、人が仙人になるとき、しばしば「白日昇天」といって天に昇って行く事例が見られます。このとき、彼らは身体一つで宙に浮き上がり、やがて姿を消してしまふのです。そんな彼らを空想科学的発想としていちいち取り上げていてはきりがありません。ですが、本来「白日昇天」などというものは仙人本人だけに可能なもの、つまりたった一人の旅たちのはずなのに、ここに、とんでもないことをやってのけた仙人が二人だけいるのです。

一人は、唐昉（唐公房）という人で、劉宋の劉敬叔撰『異苑』の巻3・第91話（『太平広記』巻440引）「唐鼠」に「昔、仙人の唐昉が家を抜き天に昇ったとき、鶏や犬もみな連れていった。ただ鼠だけが墜落してしまい、死ななかつたが腸が数寸も飛びだしてしまった。」とあります。

もう一人は西晋（265～316）の許遜という人で、俗に「許真君」と呼ばれます。その伝記によれば、その「白日昇天」は以下のようなものであったということです。

### ◎「許真君」 『太平広記』巻14引『西山十二真君伝』

真君は東晋の孝武帝太康二年（319）八月一日、洪州（江西省）の西山において、一家四十二人を引き連れて、家を抜いて上昇して去った。ただ石の函と薬を引く臼がそれぞれ一つずつ、車が一式、それから真君が使っていた錦の帳、それらは雲の中から元の屋敷跡に落ちてきた。土地の人はそこで、この地に「遊帳観」（道教の寺院を「観」という）を建てた。

後者が前者を踏まえて語られたことは間違いないだろうと思われませんが、一家を引き連れて家ごと天に昇ってしまうというのは、散見する限り、この二人をおいて他には見あたりません。そして、後者の許真君は、古くから信仰の対象となり、南宋（1127～1279）の頃に「浄明道」という道教教団の教祖と考えられるようになったほどの人物であったため、「抜宅昇天」と言えば、この許遜の昇天をいうほどになります。つまり、後代には「一家を引き連れて家ごと天に昇った」のは、許真君ただひとりと捉えられるようになるのです。

それはともかく、前者は実は、死に損なつた鼠が、三年して「鼠のような格好でやや

長く、青黒い色をしている。腹のあたりに腸のようなようなものがくっついていて、時々抜け落ちる。別名〈易腸鼠〉という「唐鼠」に変わったことを述べるいわば由来譚なのですが、むしろ、仙人でもないのに一緒に「天上界」に連れて行かれた家族や家畜がどうなったのか、そちらの方が気になるところです。彼らにとって見れば、まさに「ロスト・イン・スペース」の体験だったに違いないのです。残念ながら、古代中国の人々に、そんなところを語ろうなどという発想は、全く埒外のものでした。

それにしても、「石の函、薬を引く臼、車が一式、錦の帳」を落としながらというのは、とてもではないですが万全の飛行とは言えないでしょうに、よく無事に昇天できたものです。もし墜落でもしていれば、中国奥地から宇宙船に乗ってペンギン村にやってきたツンさん一家（鳥山明『ドクター・スランプ』）の先取りになっていたことは間違いないでしょう。

### 3. 潜水艦——始皇帝の〈ノーチラス〉号

---

次に潜水艦です。此方の方はあまり事例がありません。それらしい記述を二例発見しましたが、年代にもものすごい開きがでてしまいました。

まず古い方は、四世紀末の記録で、秦の始皇帝にまつわるものです。

#### ◎螺舟 晋・王嘉『拾遺記』巻4

秦の始皇帝は神仙のことを好んでいた。あるとき宛渠の民が〈螺舟〉に乗ってやってきた。舟の形は巻き貝に似ていて、海底に潜行するが、水は入ってこない。一名〈淪波舟〉という。

「巻き貝の舟」とは、やはり人間の発想には、一種の限界というか、時間や場所を超えた共通性があるようです。

もう一例は、11世紀後半、宋代の龐元英という人の著した『文昌雜録』という書物の中に見える記述です。元豊年間（1078～1085）にある政府の高官が目撃ということです。

とある日暮れ、客人が新開湖の中にを発見した。数人で一緒に草むらの小道を進み、水辺まで行くとわずかに光が見えた。突然明るさが月のようになり、濃い霧の中でもお互いの顔が見えた。忽ち筵ほどもあるハマグリが現れた。殻の一方を水に浮かべ、もう一方は帆のように立てていた。風のように速くて、小舟が争って後を追ったが、ついに追いつけなかった。遠く離れると沈んでしまった。

こちらは、『拾遺記』の例と違って二枚貝のような格好をしているとあります。また、全くの正体不明です。遭遇譚としては多少の信憑性があるでしょうが、話としては今ひとつ空想の面白味に欠けます。

#### 4. 謎の発光体

これはもう、発想が科学的とか空想科学的着想とかいう問題ではなく、現実の未確認飛行物体目撃例ということになるかも知れません。「宇宙船」のおまけとして挙げておきます。

中国史上もっとも有名なUFOの目撃例として紹介されることもあるのが、北宋の大詩人にして、「東坡肉」を生み出した食通としても知られる蘇軾（蘇東坡）の報告です。

熙寧四年（1071）、蘇軾は杭州（浙江省）の通判（副知事）に任命され、十一月に任地に向かう途中で、今の江蘇省鎮江市付近にあった金山寺に立ち寄りしました。今は陸続きになっているのですが、当時、この南朝以来の名刹は揚子江に浮かぶ島の上にあったのだそうです。先を急ごうとした蘇軾でしたが、寺僧の勧めで夕暮れの長江の風景を見物に出かけます。そして、「遊金山寺（金山寺に遊ぶ）」という詩を作りました。その後半に次のように詠まれています。

是時江月初生魄	是の時 江月 初めて魄を生ず
二更月落天深黒	二更 月落ちて 天 深黒なり
江心似有炬火明	江心 炬火の明らかなるに似たり
飛焰照山棲鳥驚	飛焰 山を照して 棲鳥 驚く
悵然歸臥心莫識	悵然として歸臥し 心に識る莫し
非鬼非人竟何物（*）	鬼に非ず 人に非ず 竟に何物ぞ
江山如此不歸山	江山 此の如きに 山に歸らず
江神見怪驚我頑	江神 怪を見わして 我が頑を驚かしむ
我謝江神豈得已	我 江神に謝す 豈に已むを得んや
有田不歸如江水	田有って歸らざらなや 江水の如くならん

\*自注：是夜所見如此（是の夜の見る所 此の如し）

「月が隠れて真っ暗闇の長江の中程に、松明のような明かりが見えたが、幽霊の仕業でも人の仕業でもなさそうである。一体何者だったのか」と述べた上で、「その夜に見たのはこのようなものであった」と自注をつけていることを見ると、どうやら誇張ではなく、実際に目撃したままを詠んだのでしょう。その光が、蘇軾には全く得体の知れないものであり、彼が少なからず恐怖を感じたのは、確かな事だと考えてよいでしょう。

しかし、浙江あたりでは揚子江の川幅はとてつもないものですから、目撃者・蘇軾と

発光体の距離はかなりあったはずですが、もっと至近距離で目撃した例はないのかと見てみますと、『夷堅志』の中に、夜間に現れる発光体について述べた一篇がありました。少し長いですが、全訳を紹介しましょう。

◎夜見光景 宋・洪邁『夷堅三志』壬卷3

江西の民間に伝わるところでは、夜間に煌々と輝く発光体が現れることがあり、それを〈鬼車〉と呼ぶのだそうだ。そして、もしもそれを見たら汚物で目を覆わなければならないのだとか。近づいて注視すると、或いは男性の、また或いは女性の姿に見えるという。ただ淮浙地方で言うところの〈九頭鳥〉ではない。

臨川の劉彦立は二人兄弟で、母親と暮らしていた。ある夜のこと、家の裏に生えている松の上に、太陽のように円い光が現れた。地面から二丈（約6 m）ほどのところに浮かんでいたが、近づくと暗くなってしまった。二人は宝物があるのだろうと思って、地面を掘り返してみた。しかし、地下水を掘り当てただけで、何も発見できず、掘るのをやめた。隣人も光を目撃していて、目を覆いながらこっそり窺い見ると、光の中には女の人の姿があり、衣服や帽子もはっきりしていたという。

後に、黄齊賢という人が、劉彦立の家を訪ね、夜更けまで語り合ったが、雨が降ってきたので帰宅することにした。すると従僕が駆け込んできて黄齊賢に告げた。

「驚いたのなんの。突然、太陽みたいなのが前の山の山頂から三丈（約9 m）ほど飛び出して、草木もはっきりと照らしだされ、もう真っ昼間みたいでした。雨が降ってくると光は消えてしまいました。」

劉彦立は甚だ恐ろしくなり、しばらくして死んでしまった。

黄齊賢の隣家・蔡家の召使いもかつて目撃したことがあった。太陽みたいなものが夜中に現れ、色は火のように赤かった。着地したところを犬が吠えて追い回すと、光は地面を這って逃げ、近所の曾家の玄関の所で止まり、すぐに消滅してしまった。蔡家では翌日に地面を掘り返して、石を発見した。半年もしない内に曾家では失明者がでた。

一連の事件を見ると、この光は不吉の兆しであったのだろう。

状況から判断すると、どうも小型の発光体であったようです。犬が追い回したりしていること、中の人の姿が目撃されていることなどからして、これは極めて至近距離での遭遇といえるでしょう。なお、これらと同種のものは、清朝でも何度か目撃されており、『点石齋画報』や『飛影閣画報』といった当時の絵入り新聞で報じられています。『飛影閣画報』が報じた例では、南京の南の空に現れた火球が、風に逆らって西から東へゆっくりと、わずかに音を発しながら飛んでいったということです。

それにしても、現代のU F O目撃報告によく似ています。現代人には、もっと想像力

遅しく「報告」してほしいものです。

さて、某TVプロデューサーの特番や、学研の某誌のようなUFO話が続きましたが、そういったものに付き物なのが、「キャトル・ミューテーション」、家畜の怪死事件です。眼球や生殖器などが切り取られ、血液もなくなっている、しかし死骸の周りには血痕も何も残っていない、というのが特徴です。宇宙人の仕業だとか、米軍の陰謀だとか騒ぐ人たちもいますが、どうやら単なる自然現象で、眼球などは鳥に食べられたものであるというのが真相のようです。大体、死骸を発見して騒いでいるだけで、宇宙人なり米軍なりの「犯行現場」を目撃した事例がないのはお話になりません。彼らは、一千年前の人にも及ばないということになるでしょう。最後にそれを紹介して、締めくくりたいと思います。

◎河北軍将 唐・段成式『酉陽雜俎』巻15（小題は『太平広記』巻365による）  
工部員外郎・張周封の話である。

今年の春に墓参りの休暇で帰り、湖城県（河南省）の宿に到着した時にこんな話を聞いた。去年の秋、河北の軍将がここを通ったことがあった。そのとき、郊外数里の所で、突然、一斗升のような旋風が起こり、常に馬の前に位置し続けた。軍将がこれをむち打つとますます大きくなり、馬の首をめぐり、たてがみは植え付けたように逆立った。軍将は恐ろしくなって馬から降りた。様子をうかがうと、たてがみは長さ数尺にも逆立ち、その中に赤い糸のように細かいものが見えた。馬はしばしば立ち上がって嘶いた。軍将が怒って、佩刀を取って払うと、風は消滅し、馬も死んでしまった。軍将が馬の腹を割いて調べると、腹の中には腸（『酉陽雜俎』のテキストでは「傷」に作る。ここでは今村与志雄の校訂に従った）がなかった。どういう怪なのか分からなかった。



## 1. 月に架ける橋

---

月と言えば、我々の地球が有する唯一の衛星であり、A・C・クラークの傑作『湯きの海』の舞台であり、そして現実の宇宙開発において重要な役割を期待されている天体です。

また、我が国では『竹取物語』におけるかぐや姫の故郷として知られています。しかし、中国の元になった話では仙界や天界といった漠然とした設定であり、月と限定されているわけではありません。それどころか、月には高さが五百丈もあり、傷がすぐに塞がってしまう桂の木があり、仙術を学んでいたときの過失の罪を償うために、呉剛という男がいつもこの木を伐らされているのだとも言います（『酉陽雜俎』巻1・天咫）。まるで流刑地です。どうも、元来月世界というのは、あまりよくないイメージで捉えられていたようです。

また、日本では「月には兔がいて餅を搗いている」という説話が一般的ですが、少なくとも古代中国では、「玉兔」は仙薬を搗いていますし、それよりも「姮娥（嫦娥）」や「蝦蟇」のほうが通俗的であったようです。

「姮娥（嫦娥）」というのは、五帝の一人・堯の命令で十個の太陽の内の九つを打ち落としたという羿の妻とされています。彼女が月に行ったことについては、『淮南子』覽冥訓などに、「羿が西王母に不死の薬を請うた。まだ服さないでいる間に、姮娥が盗み飲んで仙人となり、月に逃げてしまった」という説話が語られています。そして、この「姮娥」が月で「蟾蜍」つまり蝦蟇になったという説が、『淮南子』の今は失われて他書に引かれて残った部分などに書かれています。そして月の満ち欠けというのは、この蝦蟇が月を食べるために起こるのだと伝説は伝えています。こちらの説話からも、月はあまりよいイメージは持たれていなかったのではと推測されます。

そんな月を、「開元の治」を行った皇帝として、そして楊貴妃とのロマンスで知られる唐の玄宗皇帝が訪れたという伝説があります。

玄宗皇帝が術士に誘われて月の宮殿を訪れ、そこで聴いた「霓裳羽衣曲」を地上に伝えた、というこの物語は、中国では極めて有名であり、後世、舞台演劇にも仕立てられました。その物語にはいくつかのバリエーションがあるのですが、『太平広記』巻22の「羅公遠」（『神仙感遇伝』『仙伝拾遺』『逸史』等より引く）に、次のような一段があります。

開元年間、中秋の十五夜に、玄宗は宮中で月を愛でていた。すると羅公遠が、「陛下は月へ行ってみたくはございませんか。」

地上の宮殿と月との間に架ける橋、まさに宇宙へ架ける橋と言えましょう。これは一見、先進的な発想のように思えますが、実際の所、「橋」という建造物の持つ、「渡れない空間を超えて二点を結ぶ」という性質からすれば、自然と導き出される事なのかも知れません。

また、作用や性質から導くのだとすれば、本来水平に架けられる橋よりは、次のような道具を使う方が自然なのかも知れません。

道術で江南地方に知られた周生という人が、とある寺で数人の人と中秋の名月を楽しんでいて、話が玄宗皇帝が月宮に遊んだことに及んだ。客たちは自分たちにはそんなところに行くことが出来ないと言って嘆いた。周生は笑って、自分は道術を学んでいるので、月を取って懐に入れてくることができると言った。そして彼は一室に百膳ほどの箸を用意させ、それを縄で結んだ。そして「これを梯子にして月を取ってくる。呼んだら見に来てくれ」と言って部屋を閉ざした。暫くすると雲もないのに天が暗くなった。急に周生の呼ぶ声があり、客たちは部屋に駆けつけた。周生が懐から一寸ほどの月を取り出すと部屋は突然に明るくなり、寒さが骨身に浸みた。

以上は、『太平広記』巻75所収「周生」、また『類説』巻23所収「架梯取月」の要約で、『宣室志』という小説集が出典になっています。

月は天に浮かんでいるもの、しかも時間とともにその位置を変えます。高度が低いときならいざ知らず、頭上に輝いているときにそこに手を伸ばそうと思えば、梯子を使うのが自然な発想でしょう。

## 2. 天に登る梯

---

中国では、天に登るための梯子を「天梯」と呼びます。『楚辞』に収められている漢の王逸『九思』中の一編「傷時」に、「縁天梯兮北上、登太一兮玉臺」、また同じく漢の劉歆「甘泉宮賦」に「封巒為之東序、縁石闕之天梯」などとあります。ただ残念なことに、その具体的な様子というのは全く分かりません。加えて、たぶん現実の宮殿に対する讃辞としての比喩的表現、という意味合いが強いようにも思えます。ともあれ、中国の神話研究の泰斗・袁珂氏によれば、これが「天梯」という語の始まりであるようです。そして「天梯」という語は、しばしば高峻な山を表す比喩としても用いられます。そのような高く聳える山の中には、次のようなものもあります。

崑崙の丘は、登って倍の高さに達すると、これを涼風の山という。これに登ると不死になる。その倍の高さまで登ると、これを懸圃という。これに登ると霊となり、風雨を操ることが出来る。その倍の高さまで登ると、もう上天である。これに登ると神となる。これを太帝（天帝）の居という。（『淮南子』墜形訓）

また、この引用に先立つ記述にも、「禹（夏王朝の始祖）は土を盛って洪水を埋めて大山を作った。崑崙の墟の外を平らにして、中に九層の城を造った。その高さは万一千里、（幅は）百一十四歩二尺六寸である。……傾宮、旋室、縣圃・涼風・樊桐が、崑崙の墟の門の中にある。」ともあります。これほど高ければ「天梯」というのも頷けようというのですが、想像を絶したような高さを誇り天に通じ、また同時に『山海経』海内西経よれば天帝の下界での都ともされる崑崙の山というのは、「禹は土を盛って」云々という記述に従えば、どうやら地上から天空に向けて人工的に築かれたものらしいということになります。

別の記述を見てみると、『龍魚河図』では「崑崙山は天の真ん中の柱である。」（『芸文類聚』巻7）としており、『神異経』でも、「崑崙に銅柱がある。その高さは天に入るほどである。所謂天柱である。周囲は三千里、円い周囲は削ったようになっている。銅柱の下には建物がめぐらされている。」（同巻7）となっています。山とはいっても、天に向かってまっすぐにどこまでも高く聳える山を、柱のイメージで捉えたのでしょう。

どこか「バベルの塔」を思わせるところがある「崑崙」ですが、「バベルの塔」とは決定的に違っている外見上の特徴があります。『海内十洲記』によると、「崑崙」は「鉢のような形で、下が狭く上が広い」と言うのです。地上からのびているのだとすると、随分安定が悪そうです。この形は「軌道エレベータ」のように、静止軌道から吊して

いるなら好都合でしょうが、それなら軌道から外側にのびた部分がないと釣り合いません。

このほかに天に通じる山としては、群巫が昇降上下する「靈山」「登葆山」、柏高（柏子白）が上下して天に至るという「肇山」などが『山海経』に見えます。

さて、今のは山でしたが、『淮南子』墜形訓では、「これを太帝（天帝）の居という」の少し後ろに、次のような木のことが書かれています。

建木は都広にある。衆帝の上下するところである。日の中する時には影が無く、呼んでも響きがない。けだし天の中心なのであろう。

注釈家の高誘はここに、「建木はその形は牛のようで、これを引くと皮がある。冠の紐か黄蛇のようであり、葉はうすぎぬのようである。都広は南方の山の名である。……。衆帝が都広山によって天に登り、降ってくる。だから上下するというのである。日の中するときには、日は人の真上にあり、影が出来ない。だから、けだし天の中心でなのあろう、というのである。」と注釈を施しています。同種の記述は『山海経』や『呂氏春秋』といった書物にも見ることができます。これもまた、一種の「天梯」と言えるでしょう。しかも崑崙では「登る」方が強調されているだけでしたが、此方では「衆帝の上下するところ」と登りと降りに使われたことが明記されています。まさしく梯子です。おまけに、高誘の注釈の「日の中するとき」云々に従えば、この「建木」は南の地方でも、かなり赤道に近い所にあるということになります。天に通じる梯子としては、かなり地理的に恵まれています。

この「建木」について、『山海経』海内経には少し変わった記述があります。

木があり、葉は青で茎は紫、花は黒く実は黄色である。名を建木という。百仞の高さで枝が無く、上に九つの【木屬】（枝の曲がりくねったところ）があり、下には九つの枸（根がわだかまり交錯したところ）がある。その実は麻のようで、その葉は芒のようである。大皞（三皇の一人・伏羲）がここを過ぎたところである。黄帝が為すところである。

どうもよく分からない記述です。「百仞の高さで枝が無く、上に九つの【木屬】があり、下には九つの枸がある。」というのは、簡単に言って、チア・リーディングなどで使うバトンのような格好なのではないでしょうか。また、最後も難しく、古代の注釈家・郭璞は「過」を「経過」、「為」を「治護」と解していますが、神話学者の袁珂氏は、「過」は上下すること、「為」は正しく「造る」の謂だとしています。時代的に言って伏羲

より黄帝の方が後なのですが、ともあれ、袁珂氏の説に従えば、この「建木」も、「崑崙」と同様に人工の「天梯」であるということになります。

このほかに神話に語られる大樹としては、日本の別名としても用いられる「扶桑」や、「若木」などがありますが、袁珂氏が「みな高さが数百丈、数千丈乃至千里の大樹と雖も、これによって天に登ることができるとは言っていない」と指摘するように、「天に至る」というような記述はどこにも見いだすことが出来ません。残念ながら「天に通じる」大樹は、ここに挙げた「建木」だけのようです。

## 1. 偃師造人～周王朝の人造人間

---

「ロボット」、それはSFの代表的且つ古典的テーマの一つで、同時に工学的な意味において最も現代的という点で、非常に興味深いテーマだと言えます。そして、おそらくは最も世間一般に知られた概念だとも言えます。「ロボット」といえば、やはりアイザック・アシモフですが、彼の唱えた《ロボット三原則》は、今やSF関係者以外にも広く知られています。

この「ロボット」という興味深いテーマのSF的考察については、石原藤夫氏の『SFロボット学入門』という優れた著作があります。その巻末には「古典ロボットSF解説年表」が付されていて、石原氏は、ホメロスの『イーリアス』より始め、西行の『撰集抄』にもふれつつ、様々な古典ロボットについても解説を施しておられます。それは今日においても非常に貴重な研究であることに間違いはありませんが、残念ながら中国の古典についてはふれておられません（とはいえ、その価値が揺らぐというものではありません）。

そこで、浅学菲才の身も顧みず、その補遺を試みたのが本稿です。

さて、中国古典小説において、最も活躍するロボットといえば、恐らくは「哪吒」でしょう。

この名を『西遊記』の第4回及び第83回に登場する「托塔天王李靖の三男」としてご記憶の方もおられるでしょう。しかし、彼が本当に活躍するのは、『封神演義』です。

どちらも、「龍を退治するほどの力を持っていたが、死んだ後に人智を越えた力によって新たな肉体を与えられて再生した」という点で共通しています。「ロボット」と言うよりは、その事情の類似性から、平井和正氏が「エイトマン」をサイボーグと規定していたのに倣うべきかも知れません。

また、『封神演義』には、「黄巾力士」という完全なアンドロイドが登場します。これは仙人達に使役されているもので、いつも首に黄色の布を巻いている為はその名があります。ただ、その活躍は非常に限定されていて、大体が、殺されそうな人間を一瞬の内に仙人の元に連れてきて、その命を助けるというものです。自らの意志を持って動いているというわけではないのです。

ともあれ、「哪吒」や『封神演義』については門外漢が下手な解説を加えるよりも、現物を読んで戴くのが一番よいと思われます。『封神演義』は、その面白さでは、『平妖伝』とともに、『西遊記』『三国志』『水滸伝』『金瓶梅』の所謂〈四大奇書〉を上回るともされています。また、その奇想天外な兵器の数々を駆使した戦争の様子は、イ

ンドの「マハーバーラタ」にも匹敵するといっぴよいでしょう。

その『封神演義』も一昔前までは知る人ぞ知る存在でしたが、近年では講談社文庫や光栄の単行本の他、数種の翻訳が出版されました。更に大幅にアレンジされたコミック・TVアニメが大ヒットを記録したことで、若年層にとっては〈四大奇書〉を上回る有名中国古典となってしまいました。

章回小説の中にも、SF的に極めて興味深い作品・描写は数多く存在するでしょうが、筆者は明・清の章回小説を守備範囲とはしていないので、ここでは以上の解説に止めたいと思います。それらについては、武田雅哉氏の著作などを参考にされることをお薦めいたします。

では、以下、宋以前の小説を中心に、SF的作品を見て行きたい。尚、今回は考察よりも、作品の紹介に重きを置きたいと思います。

まず、「ロボット」についての最も古い記述だろうと思われるのは、『列子』湯問篇に見える所謂「偃師造人」です。話は以下の通りです。

#### ◎「偃師造人」 『列子』湯問篇

周王朝五代の王・穆王（BC1000頃）は西へ行幸し崑崙山を越え、弇山にまで行って帰ってきた。まだ中国に帰り着かない内に、途中でとある国が一人の技術者を献上した。名は偃師といった。穆王は彼を自分の前に進ませて「お前はどんな能力を持っているのか」と尋ねた。

偃師は答えた。

「私は命じられたままに試みます。しかしながら私には既に拵えた物がありますので、まずそれを御覧になって下さい。」

そこで穆王は命じた。

「ならば日を改めて持参せよ。儂はお前と共に見るとしよう。」

翌日、偃師は王に謁見した。王は「お前と一緒に来たのは何者か。」と訊ねた。偃師は「私の作った役者人形です」と答えた。

穆王は驚いてこれを見たが、立ち居振る舞いは本当の人間のようだった。

偃師が人形の顎を動かしてやれば旋律に合わせて見事に歌をうたい、腕を持ち上げてやれば音楽に合わせて舞を踊った。様々な仕草も思いのままであった。王は本当の人間ではないかと思った。盛姫や側女たちと見物していたが、演技が終わろうというときになって、人形は目を瞬いて穆王の側女たちに誘いをかけた。

それで王は立腹し、忽ち偃師を殺そうとした。偃師は震え上がって、すぐさま人形を解体して穆王に示した。

なるほど、みな革や木を材料として膠や漆で固め白黒赤青といった色を塗って組み立

てたものであった。穆王が詳細に調べてみると、内は肝臓・胆嚢・心臓・肺臓・脾臓・腎臓や胃腸、外は筋肉・骨格・手足や関節・皮膚や毛髪・歯に至るまで、全て作り物であった。しかも揃っていないというものは無かった。それを組み立てると元通りになった。穆王が試みに心臓を取り外すと口がきけなくなり、肝臓を外せば目が見えなくなり、腎臓を外せば歩けなくなった。穆王は「人間の技術も極めれば造物主と同じ事が出来るのかのう」と感心して、副車（乗り換えるための予備の車）に命じて偃師を載せて都へ連れ帰った。

さて、かの魯の班輸は雲梯を作り、墨子は飛鳶というからくりを作り、各々自分の技術こそ最高だと自負していた。班輸の弟子の東門賈と墨子の弟子の禽滑釐は偃師の技術のことを聞いて、それぞれ師に告げた。それから班輸と墨子は二人は死ぬまで技術を自慢しなくなり、時にコンパスや定規を手にするだけになった。

木・革・漆・膠という材料がなんとも東洋的ですが、極めて精巧なアンドロイドであることは間違いないでしょう。「心臓を取り外すと口がきけなくなり、肝臓を外せば目が見えなくなり、腎臓を外せば歩けなくなった。」というのに、何の意味があるのかと疑問に思われるかもしれませんが、これは五行による対応です。もっともこの五行の対応というのが、いろんな書物、時には同一の書物内に於いてすら統一を見ないことがあるので、ここの対応が「正しい」かどうかというのは判断がつかないのですが、ともあれ、この対応が備わっているということは、ただの「からくり」ではなく、極めて人間に近いものであることを物語っているのです。ここで敢えて、五行思想を持ち出してきているのは、道家の書である『列子』の性格のためで、その点は純然たる小説でも神話でもないことをうかがわせます。

さて、『列子』の意図はともかく、ここで最も重要なのは、「人間の技術も極めれば造物主と同じ事が出来るのかのう」という穆王の感慨です。

このことは、換言すれば世界で最も現実的といわれる中国人は、人間の技術で完全なアンドロイドを作り出すこと、より普遍的には自然の存在や作用というものは全て人工的に再現することが可能であると、千年以上も前に恐らくは確信していたということです。他の地域では、「ロボット」に類する存在が概ね神話の中で語られ、そこに神の力が介在していたことは、見事に一線を画しています。もっとも、章回小説あたりになると仙人が介在してくる――「黄巾力士」の例がこれに当たる――のですが、仙人はあくまでも人間の延長線上に位置付けられるもので、人とは隔絶した次元に位置付けられる「神」とは異なるので、大筋では『列子』の主張が保たれていると言えるでしょう。

この、「偃師造人」のアンドロイドによく似たものが、あの『三国志演義』で有名な



諸葛亮にまつわる伝説の中に登場します。明代の『五雜俎』などに見える話なのですが、孔明が作った「木牛流馬」という輸送機械は、彼の妻が、麵を捏ねさせる目的で作った人型ロボットをヒントに作られたというのです。

そして、六朝時代の祖冲之（祖沖之）はこの諸葛亮の機械を復活させ、千里船（おそらく人力駆動の外輪船）や水碓磨（水車駆動の挽き臼）を作ったといえます。この祖冲之は、円周率を正確に計算した人物(※1)として知られる大学者です。

そういったいくつかの記述はあるものの、先秦漢魏の書物における「ロボット」の記述というのは、他には殆ど見られないようです。

---

※1 『隋書』卷十六「律曆志上」に、「昔の数学では、円周率が3でるとき、円径率を1としていた。その方法は実際とはかけ離れていたもので、劉歆・張衡・劉徽・王蕃・皮延宗といった人たちが、各々新率を出したが、統一した結論には達しなかった。(劉) 宋の末、南徐州從事史の祖冲之は、更に精密な方法を用いて、円の直径1億を1丈として計算し、円周率の上限は**3. 1415926**、下限は**3. 1415927**とした。正確な数値は上限と下限の間にある。密率は直径**113**で円周が**355 (355/113)**、約率は直径**7**で円周が**22 (22/7)**である。」とある。

## 2. 盛唐のからくり

そこで以下、漢魏以降、主として六朝唐五代の小説を集めた『太平広記』という書物の中から、「ロボット」的記述のある作品を抜き出してみたいと思います。

まず、『太平広記』巻225から227にかけて「伎巧」という部立てで集められている中に、『列子』同様の「からくり」系の話が幾つか見られます。

恐らく六朝の頃の話と思われるが、「魯般」（出『酉陽雜俎』）という話があります。

### ◎「魯般」 唐・段成式『酉陽雜俎』

『朝野僉載』によると、魯般は、敦煌の人である。生没年の詳しいことは分からない。その技術の巧みさは造物主の技に等しいかと思われた。

涼州の地で仏塔を造った。その時、木の鳶を作り、いつもからくりを動かすこと数回で、これに乗って飛んで帰っていた。ほどなくして、彼の妻が妊娠した。彼女の父母は不義と思ってそのことをなじったので、妻は具さにそのわけを話した。

魯般の父は後に鳶を見てこれを密かに手に入れて、からくりを十数回動かし、これに乗って、そして呉会に至った。呉の人は妖怪だと思って、そこで彼を殺してしまった。

魯般はまた木の鳶を作ってこれに乗り、そして父の遺体を取り返した。呉の人が父を殺したことを怨んだ。そして肅州城の南で、一体の仙人の木像を作り、東南を指し示させた。呉の地は三年間も大旱魃に襲われ、占いをして、魯般の仕業だと分かった。（呉の人々は）供物をふんだんに施して彼に謝罪した。魯般はそこで木像の腕を切り落とした。（すると）その月の内に呉には大雨が降った。

本朝〔唐のこと〕建国の間もない頃、土地のものたちは、まだこの木仙に祈りを捧げていた。戦国時代、公輸班も木鳶を爲り、それで宋国の城の様子を窺った。

『酉陽雜俎』は、『朝野僉載』という書物から引いているのですが、現行本の『朝野僉載』ではすでに失われてしまっています。『酉陽雜俎』が引用していたおかげで、我々は唐代における魯般伝説の一端を知ることが出来ます。

さて、その魯般伝説ですが、篇末に名のみえる公輸班は、「偃師造人」の班輸と同一人物です。一名を魯班また魯般といい、魯班尺を作った人物とされています。結果的に本篇の主人公・燉煌の魯般は彼と同姓同名になります。全くの同一人物という説もありますが、戦国時代には「敦煌」はまだ無かったはずですし、一つの話の中で魯般と公輸班という違った呼称を、一人の人物に対して使うことは余りにも不自然ですから、同名

の別人と考えるのが妥当でしょう。或いは、技工に巧みなことから、「魯般」の名をもって呼ばれたのかも知れません。何れにしても、匠の聖人として崇められ、様々な伝説が生まれた結果、ここに見られるような混乱混同が生じたのでしょう。

なお、魯の公輸班については『孟子』離婁篇上、『荀子』法行篇のほか、『墨子』魯問篇・公輸篇に見えます。

魯般・公輸班が木鳶を作ったというのは、『墨子』魯問篇に「公輸子 竹木を削りて以て鵠を爲る、成して之を飛ばさば、三日にして下らず。」とあるのが元になっているのでしょう。

ちなみに、公輸班と墨子は、恐らく文献で確認できる限りに於いては中国史上最も早く、ともすれば世界初と言ってよい戦術シミュレーションを行っています（『墨子』公輸篇）。

それは兎も角、本篇に見られた「からくり」は『列子』のものに比べれば見劣りはしますが、基本的な姿勢には違いがありません。かなり精巧にできていて一見人智を越えていそうでも、それは「優れたからくり」で、純粹に高度な技術の産物として扱われています。また、「その技術の巧みさは造物主の技に等しいかと思われた」とあるように、その技工の巧みさは「自然の造物主」と比べられています。ここにも『列子』同様の「人間の技術に対する確信」を見いだすことが出来ます。

ただし、後半の「木仙人」のくだりは「からくり」とは何の関わりもありません。木像の中に仕込んだ「からくり」で雨を降らしているわけではありません。

こう言った記述は、どちらかと言えば神仙譚に近いもので、その点でこの物語は他の「伎巧」のものとは多少異なった傾向を見せています。「木仙人」のくだりを解説するなら、東照宮の眠り猫ではありませんが、「非常に巧妙に作られたものは本物と同じ作用を持つ」という考えに基づいた記述と言えます。非常に上手く描かれた人物画を傷つけたら、モデルとなった人物が苦しみだした、という話は、唐以前の六朝時代（かの“書聖”王羲之の時代）から存在していますが、ここの「木仙人」は、これらの系列に位置付けられるでしょう。

また蛇足ながら、私が見た限りにおいて『列仙伝』『神仙伝』『集仙録』といった書物が集めている古典的な仙人譚の中には「ロボット」という「技術」の産物は登場しません。

さて、引き続いて『太平広記』〈伎巧〉中から、『遊仙窟』の作者・張文成が著した『朝野僉載』を出典とする、興味深い三点を引いてみましょう。

## ◎殷文亮

洛州の殷文亮はかつて県知事であった。技巧に心酔し酒を好むたちだった。木を刻ん

で人を造り、あやぎぬの衣を着せた。酒を酌して杯を勧め、それらはすべて順序が整っていた。また妓女を作った。歌をうたひ笙という笛を吹き、それらはすべて音楽の節にあっていた。客が酒を飲み尽くしていなければ、木の子供は杯を受け取ろうとはしなかった。酒をまだ飲み終わっていなければ、木の妓女は歌をうたい笛を奏でて促した。此れらはその神妙な技術を計り知る者はなかった。

### ◎楊務廉

木工頭の楊務廉は大変技工が巧みであった。かつて沁州城内で木を使って僧侶の像を作った。手に一個の椀を持って、自ら托鉢を行った。椀の中に金がいっぱいになると、機構が働いて、自ずから声を発して「布施」と言うのであった。町の人たちは先を争って見に集まり、その声を出させようとした。おかげで、布施は日に数千銭にもなった。

### ◎王琚

郴州の長官の王琚は木を使って川獺を作った。水の中に潜って魚をとり、首をのぼして浮かび上がってくる。さて川獺の口の中に餌を入れ、機械と連動させる。石を縄で結わえ付けると沈む。魚が餌をとると、機構が働いて口を閉じて魚をくわえ、石がはずれて浮かび上がってくるのである。

以上の例は、「からくり」という技術について正面からとらえた話で、非常に冷静な視線で事柄をを観察し記述する張文成らしい記載だと言えます。

しかも、三つ目の「王琚」では、川獺のロボットで魚を捕るという非常に変わったことをしています。ロボットに内蔵されている魚を捕る仕掛け自体は、単純な罟ですから、実現は可能だとしても、なぜ川獺なのでしょう。

鵜飼いならば我々にも馴染みがありますが、「川獺飼い」というのは聞いたことがありません。しかし、唐代には本物の川獺を使って魚を捕る漁が現実存在していたことが、この「王琚」の出典である『朝野僉載』や、段成式の『酉陽雜俎』の中に見えているのです。道具をその機能にふさわしい動物の形にしたがる中国人の特徴が現れていると言えるでしょう。

ともあれ、ここでひとつ気がつくのは、これらが如何に巧妙なからくりではあっても、それは単一の目的のために作られたもので、けして汎用であったり万能であったりするものではないということです。

『列子』の「ロボット」も一見万能に見えましたが、「役者」という特定の目的のために作られたものでした。こうしてみると、どうやら古代中国の「ロボット」とい

うものは「オートメーション」の延長というか、極めて「現代の産業ロボット」に近い存在で、アトムやその他小説や映画に登場する「アンドロイド」や「ロボット」とは根本的に異なるもののように思えてきます。

次に挙げる「馬待封」も、純粋な技術の話、単一の目的の為に作られたオートメーションの話です。

### ◎馬待封 唐・牛肅『紀聞』

開元年間（713-741）の初めごろに皇帝が外出するときに使う車を修理した。東海郡の馬待封は技巧が大変優れていた。そこで指南車・記里鼓・相風鳥等、馬待封がこれらをすべて改修した。その巧みなことは古のものを凌駕していた。

待封は皇后の為に化粧道具も作った。台の上には鏡が立っており、台の下は二層になっていて、それぞれに戸がついている。皇后が櫛ろうとすると、鏡を入れた箱の後ろが開き、台の下の戸も開き、婦人の木像が手に布巾や櫛を持って出てくるのであった。皇后が取り終わると、木人は元のところに戻る。面脂・粧粉、眉黛・髻花〔白粉や黛、髪飾り〕に至るまで、使おうとするものに依じて、すべて木人が持ってやってきて、取り終わると元に戻って戸が閉じるのである。このように道具をわたすのはすべて木人であり、皇后が化粧を終わると、全ての門が閉じ、全ての道具が持ち去られるのである。その化粧台は金銀で装飾され、婦人の木像の衣装も非常にすばらしいものであった。

待封は既に天子の行列に用いる装備を作り、また皇后のために化粧台を作った。そのようにすることが数年続いたが、玄宗皇帝は用があるときに勅命で呼び出すだけだった。待封はついに官職を拝することがなく、そのことを恥じた。

また上奏して欵器・酒山・貯金箱などの物を作ることを願い出た。皇帝はこれを許可した。それらはすべて白銀で作られていた。その酒山や貯金箱の中では、からくりが動いており、或いはその四面が開いて、風を取り入れる。風は機関を動かし、陰と陽、前と後に分かち。それによってその外側に酒を泉のようにわき出させ、杯や斗にくむのである。酒を酌するものが出入することも、すべて自動である。その技工は造化を越えたいってよい。それが完成するとかれは皇帝に報告した。皇帝は宮中に仕事にかこつけて、ついに取り合おうとしなかった。待封は己の運命を恨んで、姓名を変えて、西河山中に隠れてしまった。

開元の末になって、待封は晋州からやって来て、自ら道者呉賜と名乗った。常に穀物を絶っていた。崔邑県の知事の李勁と一緒に酒山・貯金箱・欵器などを作った。酒山は盤の中にそそり立っていて、その盤の差し渡しは四尺五寸、下に大きな亀があって盤を支えている。からくりはすべてその亀の腹の中に納められている。盤の中には山が立っている。その山の高さは三尺。連なる峰は非常に見事であった。巡れる山はすべて酒の

池に列なっている。池の外にもまた山があって周りを取り囲んでいる。池の中にはことごとく蓮が生えている。花や葉はすべて鍛えた鉄で作られている。花は開き葉は伸びている。それをもって皿の代わりにし、干し肉・塩辛・珍しい果物など酒の肴を花や葉の中に盛りつけた。山の南側の中腹に竜がいる。体の半分を山に隠して、口を開いて酒をはいている。竜の下には大きな蓮の葉の中に杯があってそれを受けている。杯には四合入るが、竜は八分まで酒を吐いたところで止まる。飲むものはこれを手にとるのである。酒を飲むのがもし遅かったら、山頂に楼閣があり、その門が開いて、酒をすすめる人形で衣冠を身につけ拍子木を持ったもの（酒使）が出てくる。そこで杯を葉にもどす。すると竜はまたこれに酒を注ぐ。その後、酒使は元に戻って、楼閣の門も閉じる。もし復た遅ければ、酒使は初めと同じように現れる。そのまま宴が終わりになり、最後まで滞るところはなかった。山の四面東西には、すべて酒を吐く龍が備え付けられている。酒を池に注いでも、池の内には穴が有って、人知れず池の中の酒を山の中に引き入れてしまう。宴が終わり酒を酌み交わすことが終わると、池の中の酒も一滴も残らないのである。欵器が二つ、酒山の左右に設けて、龍が酒をその中に注ぐと、空っぽならば器は傾き、中ばまでは平らになり、いっぱいになり満ちるとひっくり返る。すなわち魯廟の侑坐の器がこれである。君子はそれによって充ち満ちることを誡め、孔子もこれを視て誡とした。

晋の杜預（**222-284**）は欵器を造ろうとしたが成功しなかった。これは史書が載せているところである。呉賜（こと馬待封）のごときは、これを作ることが恰も普通の道具を作るかのようであった。

「指南車・記里鼓・相風鳥等、馬待封がこれらをすべて改修した。その巧みなことは古のものを凌駕していた。」として馬待封の技工の巧みさを強調しています。晋の崔豹の『古今注』によれば、「指南車」は、中華文明の鼻祖・黄帝が作ったと言い、また孔子が敬愛し理想とした周公旦が作ったとも言います。

また、物語の最後に登場する晋の杜預にしても、「春秋左氏伝」に注を施していて、それは今日でも「春秋左氏伝」を読む際の基本とされているほどです。「その巧みなことは古のものを凌駕していた。」とは、これら大聖人・大学者を越えているという事を意味していることになります。

「指南車」は歯車の巧妙な組み合わせによって、台座である車がどちらを向いても、上に載っている人形が南を向き続けるという道具です。台車の両輪の円周の差は一パーセントでも致命的となるほどの精密さを要求されると言います。今日でもその発想と構造は非常に高く評価されています。尚、詳しくはロバート・K・G・テンプル氏の『図説 中国の科学と文明』（河出書房新社）、或いはその元となったジョセフ・ニーダム

氏の『中国の科学と文明』第八巻〔思索社〕p.380-402をご参照ください。ちなみに、ニーダム氏によれば、指南車の発明は少なくともAD三世紀に遡るとのことです。

本篇では、それらに次いで、皇后のための「粧具」について述べられています。この「粧具」も人の動きに呼応して、人型ロボットが作動するからくりであるという点で、非常に興味をひかれるものがあります。とはいえ、人型ロボットも一つのことしかできませんから、道具をその機能にふさわしい動物の形にしたがる中国人の特徴が現れている「オートメーション」という事が出来るでしょう。

この小説は、それら興味深い事物についてはごく簡単な説明をしているに過ぎません。そして、ほぼその全力をもって「酒山」を描写しています。その執拗なまでの描写は全体の形から内部の構造、果てはその運用例にまでいたりします。これほどまでに「からくり」に拘り、それを技術的に記した例は、他に類を見ません。

さて、これまで紹介してきた諸篇は、『酉陽雜俎』所収の「魯般」一篇を除いて全て所謂「盛唐（720-770）」に成立した書物に引かれています。また「魯般」にしても、『酉陽雜俎』が『朝野僉載』から引いているので、基本的には、他の初篇と同時期と見て良いでしょう。

さて、盛唐というのは“詩仙”の李白、“詩聖”の杜甫をはじめ、「登觀鵲樓」で知られる王之涣、辺境への従軍に主題をとった詩を得意として辺塞詩人と呼ばれた岑参などの詩人たちが活躍した時代で、詩が文学の主流を占める、言うなれば「詩の時代」でした。この時代、小説は極めて素朴であり、六朝以来の「記録文学」的な形を残したものでしたが、こういった段階に於いて、ここに引いたような科学的に冷静な視点で「からくり」を描いた作品が存在したことは、非常に興味深いと言えます。なぜならば、唐代の小説はこの後、中唐（770-830）に入って爆発的に増加成熟するのですが、その時代の小説というのは、才子佳人の恋愛譚や異類婚姻譚などが主となってしまふのです。

つまり、非常に早い段階でSF的視点への発展の可能性を小説に持ち込んでいながら、それが志怪的な観察し記録するという姿勢と非常に密接に結びついていたが故に、発展をみなかったのです。

そして、それは文語文による所謂文言小説としての伝奇の一つの限界とっていてもよいでしょう。後代、より庶民的な放埒な発想を小説という形に結実することを可能にした白話小説の誕生によって、その限界は幾分超えられることとなりますが、現実的でありつつ、原因を追求せずに抽象的理念と類似性の発見で満足したが故に「科学」の発見に到達しなかった中国大陸の人々は、その先進性を歴史の中に埋没させ、ついに、世界でもっとも早く中国で本格SFを誕生させるという、ニーダムの言を借りれば、「西洋人の中国への負い目」を益々増大させる栄冠に手を届かせることはなかったのです。





### 3. 韓志和～唐土の日本人

---

それでは、最後に日本人の登場する作品を紹介して、本稿を締めくくりたいと思います。蘇鶻撰の『杜陽雜編』所収「韓志和」です。唐滅亡直前の小説集に特有の、事柄を淡々と述べ、そこに何の「ひねり」も見いだせず、何が言いたいのかわよく分からないという話ですが、古典的なガジェットを忠実に引き継いでいると言う点と、作者に明確な創作意識があれば、もしかしたらSF的なものに成っていたかも知れないという可能性だけは、それなりに評価できるのではないかと思います。

#### ◎「韓志和」 唐・蘇鶻『杜陽雜編』

穆宗の御代、近衛兵の飛龍隊の兵士に韓志和というものがいた。もとは日本国の人であった。木彫りの技術に優れ、鸞・鶴・鴉・鵲などの像を作った。水を飲んだり悲しげに鳴いたりし、本物と異なるところはなかった。からくりを腹の内に仕掛け、これを動かせば翼を羽ばたかせて空に舞い上がる。百尺ほどの高さにまで達し、百歩あるいは二百歩向こうまで飛んで、それから降りてくる。また木彫りの猫を作り雀や鼠を捕まえさせた。

飛龍隊の指揮官はその技術をすばらしいものだと考え、このことを天子に奏上した。穆宗はこれを見て喜んだ。

韓志和は更に高さ数尺の踏み台を作った。その上は金銀や絹で飾ってあった。これを「見龍床」と言った。置いてあるだけでは龍の姿は見えないが、これを踏むと鱗やたてがみ、爪や角までも出てくるのである。

献上したとき、穆宗は足で台を踏んだ。すると龍が雲雨を得たかのような姿で昇り騰がった。穆宗は大変驚いて、撤去させてしまった。

韓志和は穆宗の前にひれ伏して言った。

「考えてみますに私が愚かで、陛下を驚かせることとなりました。私は別に拙い技を披露して、陛下の耳目を楽しませ、死罪を贖わせていただきたいと存じます。」

穆宗は笑って言った。

「出来るというのはどのような技であるか。朕のために披露してみよ。」

韓志和は懐から数寸四方の桐製の箱を取り出した。その中には何かが入っており、名は蠅虎子（蠅とり蜘蛛）といった。数は百や二百といったものではなかった。その姿は皆な赤で、丹砂で飼うのでそのようになるということだった。それを五隊に分けて、梁州曲を舞わせた。

穆宗は宮廷楽隊を召し出し、梁州の曲を演奏させると、虎子はくるくると回って踊り、曲に合わないと言うことはなかった。詞を歌うところになるたびに、かすかに蠅の様

な声で鳴いた。曲が終ると、ぞろぞろと戻った。あたかも上下の身分があるかのようであった。

韓志和は虎子を指の上に載せて、数歩離れたところの蠅を取らせた。鷓鴣が雀を獲るかのようで、的を外すことはなかった。

穆宗はその技にいささか見るべきものが有ったことを喜び、すぐに色とりどりの器を韓志和に賜った。しかし、韓志和は宮門を出たところで、全て人に恵んでしまった。

そして一年足らずの内に、韓志和の所在は分からなくなってしまった。

穆宗は宮殿の前に千輪の牡丹を植えていた。花が咲き始めると、香気が人を襲うほどにあたりに満ちる。この牡丹は一枝に千輪咲き、大きくて紅色であった。穆宗はその盛んな様を見るたびに、世の儚さに感嘆した。

このころから宮中では夜毎に、黄白の蝴蝶が数万も現れ、牡丹に飛び集うのであった。きらきらと光り輝いていたが、夜が明けると飛び去ってしまった。女官たちは競ってうすぎぬのハンカチでこれを捕らえた。捕まえられない者はいなかった。

穆宗は網を宮中に張らせて、数百匹を捕まえ、宮殿内に解き放って女たちに追いかけて、それを見て楽しんだ。夜が明けて見てみると、皆な黄金や玉璧でつくられていた。その様は巧みでこれに匹敵するものはないようであった。女たちは争って糸で蝶の脚を結び、首飾にしたけれども、夜になると化粧箱の中で発光するのであった。

その夜 宝物庫を開いて、収蔵されている金の屑や玉の屑を見てみると、蝶となろうとしているものがあつた。宮中はそこで事情を悟った。

なお、木工に巧みな日本人であることから、韓志和を「飛驒匠」とする説があります。

「飛驒匠」といえば、古くは『日本書紀』に見える雄略天皇時代の大工の物語や、『今昔物語』に見える、絵師百濟川成と対決する物語があり、下つては、左甚五郎を「飛驒匠」とし、彼の作った女の人形が命を持ったとする物語があるように、我が国における名工の代名詞、いわば「魯般」の役割を担った名前でした。

ともあれ、元禄時代には、江戸の儒学者・松下見林が、『異称日本伝』巻上において、「韓志和＝飛驒匠」説を提唱しています。また、その少し後に、こちらは直接には「韓志和＝飛驒匠」説には関わりませんが、井沢長秀の『広益俗説弁』正編巻13が、木彫りの鳶に乗って唐に渡った「飛驒内匠」の話を載せています。

なかでも特筆すべきなのが、20世紀初めに「韓志和」についての網羅的な研究を行った那波利貞氏の説で、「全然虚妄の假作説話と考えることは出来まい」と『杜陽雜編』に史実性を認め、『今昔物語』中の大工と結びつけ、唐から帰国した韓志和が百濟川成と対決したとしています。なんとも、壮大な物語が広がっていきませんが、当時の交流

を考えれば、そうした匠の人生流転が全く不可能とは言えないというところが、また驚嘆に値します。

この「韓志和」の問題は、那波利貞氏の研究以降、永らく忘れ去られていたと言ってよい状態でした。しかし、近年になって、遣唐使などによる日中の文化・人材交流への研究が盛んになったことから、再び「韓志和＝飛驒匠」説への考証が見られるようになってきました。

- 汪紹楹 点校『太平広記』（中華書局、1961年）
- 方南生 点校『酉陽雜俎』（中華書局、1981年）
- 何卓 点校『夷堅志』（明文書局、1994年）
- 白化文 点校『稽神録・括異志』（中華書局、1996年）
- 張華『博物志』（《四庫筆記小説叢書》上海古籍出版社、1991年）
- 汪紹楹 点校『芸文類聚』（中文出版社、1980年）
- 馮逸・喬華 点校『淮南鴻烈集解』（中華書局、1989年）
- 曾慥『類説』（《四庫筆記小説叢書》上海古籍出版社、1993年）
- 釈文瑩『湘山野録』（《学津討原》本）
- 高光・王小克・汪洋 主編『文白対照全訳・太平広記』（天津古籍出版社、1994年）
- 李宏 主編『夷堅志 全訳本』（北京燕山出版社、1997年）
- 今村与志雄 訳『酉陽雜俎』（平凡社、1980年、1981年）
- 前野直彬 編訳『唐代伝奇集2』（平凡社、1964年）
- 石島快隆 訳注『抱朴子』（岩波文庫、1932年）
- 本田濟 訳注『抱朴子内篇』（平凡社、1990年）
- 渡辺卓・新田大作『墨子（上下）』（集英社、1974年・1977年）
- 小林勝人 訳注『列子』（岩波文庫、1987年）
- 小川環樹 訳注『蘇軾（上）』（岩波書店、1962年）
- 岡崎由美監修、林久之・阿部敦子訳、金庸著『倚天屠龍記2』（徳間文庫、2008年）

## 参考文献

---

- ロバート・K・G・テンプル『図説 中国の科学と文明』（河出書房新社、1992年）
- 李劍国『唐前志怪小説輯釈』（文史哲出版社、1987年）
- 武田雅哉『飛べ！大清帝国—近代中国の幻想科学—』（リプロポート、1988年）
- 武田雅哉『清朝絵師呉友如の事件帖』（作品社、1998年）
- 武田雅哉「八月の筏—中国飛翔文学史序説」（『幻想文学』44、アトリエOCTA、1995年）
- 武田雅哉「中国飛翔計画図説」13（『しにか』1995年4月号、大修館書店）
- 屋敷信晴「『西山十二真君伝』「許真君」の成立について」（広島中国学学会『中国学研究論集』創刊号、1998年）
- 那波利貞「『杜陽雜編』にみえたる韓志和」（『支那学』第2巻第2号、1912年）
- 那波利貞「『杜陽雜編』にみえたる韓志和 補遺」（『支那学』第2巻第4号、1912年）
- 蔡毅「飛竜衛士韓志和」（中西進・王勇『日中文化交流史叢書・人物』大修館書店、1996年）
- 呂応鐘「UFO五千年史」（中華飛碟學研究會）
- 饒忠華 主編『飛碟来客』（科学普及出版社、1997年）
- 齊濤『外星人と宇宙文明之謎』（青島出版社、1996年）
- 袁珂『中国神話伝説詞典』（上海辞書出版社、1986年）
- 徐朝龍『三星堆・中国古代文明の謎—史実としての『山海経』—』（大修館書店、1998年）
- 石原藤夫・金子隆一『軌道エレベーター—宇宙に架ける橋—』（裳華房、1997年）
- 農林水産省農業研究センター
- 大日本除虫菊HP
- 今井湊『中国物理雑識』（全国書房、1946年）
- 松田権六『うるしの話』（岩波文庫、1964年）
- 王勇『唐から見た遣唐使』（講談社、1998年）
- 王勇『中国史のなかの日本像』（農文協、2000年）

## 中国科学説話雑識

<http://p.booklog.jp/book/87240>

著者：嶋泉心足齋

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/jingmouyinghung/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/87240>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/87240>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ